第1回　大会計画策定（基本構想）幹事会　議事録

平成22年9月10日

開　会

＜鹿田幹事長＞
- 本日、鳥取県と高知県が全国で初めて環境省から認定を受けていたカーボンオフセットの内、鳥取県分100トン分が売れた。
- 山崎製パン岡山工場の製造したパンが売れると、一個につき1円、鳥取県に入ってくる仕組み。パンの中の部材には、大山乳業のミルクや二十世紀ナシを使ってもらったりしている。
- 今後、第2号・第3号とつなげていく必要がある。
- 来年9月から10月開催される全国豊かな海づくり大会までは、ほぼ一年前。
- 海づくり大会へ向けての活動の一つとして、白うさぎ大使を認定しての活動を行っている。今3千数百人の認定者をどんどん増やして、平成25年春に開催される全国植樹祭に繋げたいと思う。
- 今日は基本構想の検討を行うため、事務局が皆様を招集した。短時間ではあるが、検討よろしくお願いする。

＜事務局＞
- 本日の幹事会は、幹事長も含めてご出席が9名。実行委員会会則第11条第8項の規定により、大会計画策定（基本構想）幹事会が成立。
- 議長は会則により、幹事長が務める。

議　事

＜鹿田議長＞
- 今回を含めて3回の幹事会を開催し、具体的な基本構想に関する案を作成する。
- 事務局から基本構想（案）の説明を求める。

質 疑 応 答

資料　基本構想（案）第1章～第2章の説明

- 第 1 章について　了承。

- 第 2 章について。

＜委員＞
- 第2章の開催理念について、鳥取県らしさが書いてあるのは、妻木晩田や青谷上寺地だけで、その他は林業関係の同じようなパターンの書きぶり。カーボンオフセットのような新しい話題もある、共生の森の活動もやっている、森林環境保全税も取り組んで、かなりの森林整備もやっているというようなところを、盛り込むべき。
- 環境先進県鳥取に向けてどのような取り組みをしているのか、をアピールすべきだ。

＜議長＞
- 鳥取県の特徴的な取り組みを書き込む。ご指摘に沿って書き込んだものを、次回審議いただく。

＜委員＞
- 箇条書きにした方が良い。皆が読みにくいのではないか。

＜事務局＞
- 了解

＜委員＞
- 3ページ右上の図面は、主伐間伐から始まる左回転の円が、人工林を対象にしているというイメージ。例えば、里山的な利用を進めるような、イメージを加えたら、右回転の円がもうすこし説得力がある。
- スギやヒノキの話になっている。もっと幅広なポイントの振り付けにする方が良い。
- 里山と、林業地との区別が良くついていない。林業関係者からすると木材生産から入ることが一般的なので、二つの内容を一緒にすることは無理。分けて書けばよい。

＜事務局＞
- 了解

＜委員＞
・　シンボルマークが全国公募で、大会テーマは県内公募となっている理由は。

＜議長＞
・　テーマは身近なところに住む人が出しやすい。
・　マークとなると、専門性がある。それを得意にしている人が全国に散らばっている。県内在住者が、シンボルマークも創ってもらうのが理想なのだが、やはりそこは、競争がある方が良い。出来るだけレベルの高いものを選抜したい。
・　海づくり大会でのテーマ募集等も同様な方向でやっている。

＜委員＞
・　鳥取県で開催された全国野鳥保護のつどいの時は大雨が降って、荒天プログラムとなった。

＜委員＞
・　全国植樹祭は相当ひどい雨でなければ、荒天としない。カッパを着ての実施となる。

＜議長＞
・　第2章について、委員からの意見を反映させたものを、次回幹事会で提出。

資料　基本構想（案）第3章～第5章の説明

＜委員＞
・　県木（ダイセンキャラボク）をなぜ植栽候補木に入れないのか。

＜事務局＞
・　選木は、現実にその土地にあったものを、残したいとの方針。これは、植栽樹木検討専門委員会が決定したもの。自生している樹木の中には、県木は含まれていなかった。

＜委員＞
・　県木を重視して考えるべき。この植樹祭は、とっとり花回廊を売り出そうというのが大きな目的のひとつ。ダイセンキャラボクの植樹を検討してほしい。

＜委員＞
・　針葉樹はどうして植栽候補としないのか。

＜事務局＞
・　アカマツは針葉樹で候補木。スギやヒノキは基本的に自生していないので候補木としていない。

＜委員＞
・　とっとり花回廊周辺の天然林は、何度も伐採している。妻木晩田などでは、何百回も何千回も伐採をしているところ。本当の自然ではない。里山は常に必要とするものを、伐採して採取されてきた場所。本当の天然状態と同じ様な扱いをするのはいかがなものか。

＜事務局＞
・　とっとり花回廊周辺は2次林で天然林の伐採を繰り返し、何回もボウ芽を繰り返して育ってきた山であるというのは承知しているが、そこの植生を外部から持ってきて植えつけたものがあるとは考えていない。

＜事務局＞
・　植栽樹木は最終的に、実行委員会で決めるもの。
・　実行委員会前に選木したのは、必要な苗木の手配は、できるだけ早くしなければならないとの意見を実行委員会で頂戴したためで、植栽樹木検討専門委員会において、8月中に急いで選定いただいたもの。

＜委員＞
・　県木等をメモリアルとして、植えておいた方が良い。

＜委員＞
・　とっとり花回廊は、これから育っていく子どもたちに、ここで植樹祭が行われたということを、考えたり学習していったりする時に、一番適切な場所ではないかと思う。
・　県木のキャラボクとか、県の花の二十世紀ナシは、鳥取県の特徴を表すもの。これらは、学校理科の学習の中に出てくるし写真も掲載されている。植樹会場ではそれを十分に紹介していただきたいと思う。

＜委員＞
・　植栽樹木検討専門委員会の方々は、潜在的な自然植生を考えて、そこに適合した、樹種はこうだと話をされているのだろう。潜在自然植生に加えて、人間が改変する又は改編してきた歴史等を考えた時に、キャラボクやナシ、スギ等が、選ばれるのかもしれない。

＜議長＞
・　とっとり花回廊を植樹会場としたのは、ここに植栽することによって、とっとり花回廊を知ってもらえるという効果もあった。
・　自然植生と併せて、両方共に生かすべき。メモリアルで入れることも必要。

＜委員＞
・　一般植樹候補リストには、低木も高木もあって、大変数が多い。どういう配置にしていくのか。
・　私のイメージではとっとり花回廊の周辺は里山。それとは別に自生しているとか、手つかずの森林には、もっと高地であるとか、人があまり入りにくいというイメージがある。植栽候補リストの植栽地のとらえ方からすると、手つかずの森林というのならわかる。里山は人が入るところというイメージがある。ベースをしっかり押さえておいてもらったほうが、誤解がない。

＜事務局＞
・　配置計画は、これから作成する。
・　とっとり花回廊の一般植樹候補リストは、里地里山で普通にみられるもの。加えて、種子が本当に取れそうなものが記載してある。単層的なクヌギやコナラ以外にも、侵入してきても不思議ではないものも加えている。ゾーニングして整理された状態で植えつけられるものだとご理解いただきたい。

＜委員＞
・　お手播きの中に、日本の林業家ならだれでも知っている沖の山スギが選定されていない。

＜議長＞
・　ここでは、結論が出にくい話。一度植栽樹木検討専門委員会に話をつなげたい。

資料　基本構想（案）第6章～の説明

＜委員＞
・　会場は2か所だけか。

＜議長＞
・　後継者大会を含めると3か所になる。
・　お野立所をとっとり花回廊に仮設する。これを有効利用してとっとり花回廊で利用できるようになればよい。

＜委員＞
・　お野立所を舞台に使用できるような設計にしてもらえればと思う。
・　お野立所は芝生の広場に移設して使用するとよいのではないか。

＜委員＞
・　全国植樹祭の開催では、県外からの参加者に加えて、県民の多くにも参加を呼びかけていくこととなる。開催気運を高めるためには、シンボルマークやキャッチフレーズの公募、販促ツールや、メディアもあろうが、どう関心を持ってもらうのか、どうやって足を運んでもらうのか、実際にそれをどう活用するのか、というところまで考えて、身近なものという感覚がないと、一般県民からすると、盛り上がりが持続しない。
・　とっとり花回廊での植樹祭開催を、鳥取県モデルとして、県民の関心を高め、その後も引き継げる様な仕掛けが欲しい。

＜委員＞
・　とっとり花回廊と鏡ヶ成の植樹会場は、全国植樹祭後、だれが管理をするのか。

＜事務局＞
・　とっとり花回廊の森林は、森林・林業総室サイドで、きちんと管理したい。鏡ヶ成は町有林となるので、町の方で将来的な管理について検討中。

＜委員＞
・　育樹祭後の出合の森も、良く管理してもらっている。折角の施設なので、しっかり管理いただきたい。

＜議長＞
・　大会へ向けての気運の盛り上げは大切。海づくり大会は今、放流活動や、植林活動をしていただいた皆さんを、白うさぎ大使に認定している。それと同じ様に、何らかの活動に参加してもらえる様な、機会を作っていかないといけないが、体験型の仕掛けでないと実感としてわかない。実際山に行っていろいろな経験をされている人も少ない中、いかにそういう参加者を募ってやるような仕組みを作るかという取り組み姿勢にかかっているかと思う。

＜委員＞
・　童話の世界で、「おじいさんが柴刈りに行く」というのを、今の小学生はイメージできない。里山の活用といわれても、何なのかわからない。例えば、ワークショップで柴刈りのプログラムがあるかどうかは承知していないが、背負子を背負うことからまず始めるのだろう。結構身近なことから、やれれば楽しい。

＜議長＞
・　カシノナガキクイムシ被害の拡大を如何に抑えるか、県民運動でやらなければいけないという議論をしている。今のペースで防除事業を外注して処理することは限界にきている。県民にボランティアとして参加いただき、虫を退治してもらう方法は、粘着テープを木に巻いてもらう程度のことなので、危険性もなくできる。もしそれができるようなら、これも、全国植樹祭へつながる話かと思っている。
・　海づくり大会に両陛下が来られる。両陛下がまた鳥取に来たいと考えられ、２５年春に植樹祭でいらっしゃった時には、やっぱり良かったと思ってもらってお帰りいただく。そうなれば、参加された方々も満足されるのではないかと思っている。

＜委員＞
・　毎年、県の植樹祭の植栽地を、緑の少年団の交流会で下刈りしているといった活動はあまり公報されない。色々な活動がなされていることをもっと積極的に公報しないといけない。全国植樹祭を、とっとり花回廊で開催し、その後、そこに、緑の少年団やボランティアが、どう関わっていくのかという構想が基本構想に入っていかないと広がりがない様な気がする。

＜議長＞
・　構想に入れ込む。

＜委員＞
・　子供たちが、里山の利用が知らないということであれば、薪や炭の利用、やストーブだとか、間伐材の利用だとか、そういったものをセットで、見せて啓蒙する様な、仕掛けが必要。

＜議長＞
・　基本構想に位置付けて示す。

＜委員＞
・　カシノナガキクイムシの被害がすごい。植樹祭までの間、大山周辺は守れるのか。

＜議長＞
・　カシノナガキクイムシは、通常の年よりもこの暑さの中、１０日ほど早く飛び立った。それで被害が広まっている。

＜委員＞
・　全国育樹祭の鳥取開催に備えては、松枯れをきれいに整理したのを記憶している。

＜委員＞
・　カシノナガキクイムシは被害対策も必要かと思うが、健全な木を今のうちに利用することは重要なのではないか。

＜議長＞
・　老木が最初に病気にかかる。老木は巨木で太い。これを伐採処理すること自体難しい。若い健全な木は枯れない。そういう性質の病気。

＜事務局＞

・ カシノナガキクイムシは土着の虫。昔は、山の木を薪や炭にするために伐採して、その後、ボウ芽させるサイクルがあった。木を使わなくなった現在、カシノナガキクイムシは、弱った老木に穿孔。含水率の面で、快適な環境であることから、アタックする木として老木を選ぶ習性がある。そのような巨木は、山の尾根から搬出できないので、今のところ、保全対象に近いところ、あるいは景観上必要なところ等、手が出せるところは手を出している。薬剤注入の単木処理で、松くい虫のように空中散布による防除はできない。そこが難しい。カシノナガキクイムシの生息密度は、昔は密度が低かったが、だんだん上がってきている。ではそれをどうやって捕まえて密度をおとすのかは、議長が最初の挨拶で言ったように、粘着バンドを木に巻いて、虫を捕まえるとか、そういった方法しかない。

＜議長＞

・ 今、枯れた被害木に、一本一本薬を注入して、カシノナガキクイムシの退治をしている。そうすれば、次の木に飛んで行かないが、枯れない木の中に潜んでいる虫もいる。その木から、次の年にキクイムシ虫が飛び立ったりする。対策としては相対的に、虫の数を減らすしか方法がない。完全に無くすことはできないが、数を減らしていけば広がる可能性が下がる。防除法の研究を色々な人が始めたところで、本当に確実な撃退法がない。今、県が取り組んでいるのも、確実性は高い方法だが、全体的に効果が追いついていない。そうはいっても、全国植樹祭の開催まで3年しかない。カシノナガキクイムシの防除を、全国植樹祭に向けての気運を高める運動にできればと考えている。

・ 活発なご意見をいただき感謝。先ほど議論のあった植栽樹種の追加については、植栽樹木検討専門委員会と話し合いをさせていただき、その内容を皆様にお知らせの上、最終的には、実行委員会にかけて決定する。一つ難しい点が、種子を確保する期間が迫っているということなので、その様なことも、私どもの方に差配をさせていただくことをご了解いただき、これから進めさせていただくのでご了解いただきたい。